

イディオム学習への認知的アプローチ

八木橋 宏勇*

A Cognitive Approach to Idiom Learning

Yagihashi Hirotoishi*

Idioms have often been considered as a rather unmanageable language phenomenon for second language learners and teachers. This is because they are groups of words whose meanings cannot be predicted from the meanings of their constituent parts. In fact, most English learners in Japan have considerable difficulty memorizing their forms and meanings, while most of the teachers have no strategy for an effective approach to learning idioms in second language teaching. This paper discusses the processes through which idiomatic expressions are generated and proposes that tracking the motivations and bridging the gap between the literal and figurative meanings through imaging are useful as a clue to memorize and recall idioms.

1. はじめに

無数にある語の中からいくつか選び出し、それらを有意義に関連付け、繰り返し用いられることによって定着した定型表現をイディオムという。これは日本人英語学習者にとって習得が最も難しい項目の一つである。事実、筆者のインフォーマルな聞き取り調査¹によれば、ほとんどの学習者はイディオムの「形」と「意味」を機械的に丸暗記しており、また大方の教員はそれを効果的に教える戦略を持ち合わせていないようである。結果、イディオムはあたかも恣意的な語の結合であるかのように考えられ、単に丸暗記しなければならないものだと思われるのである。しかし、英語学習者にとってこの暗記が何よりも困難が伴う作業であることはいうまでもない。

本稿では、「選択あるところに注目すべき意味が潜んでいる」²という観点に立ち、イディオムは恣意的な語のまとまりではなく、我々人間の経験的知識とメタファおよびメトニミによって動機付けられた定型表現であるという立場を採る (Kövecses 2002, Yagihashi 2005)。まず認知言語学の観点からイディオムがいかにして生み出されるのかというこ

とを論じ、それをもとにイディオムへの効果的なアプローチを提案したい。なお、認知言語学ではあらゆる言語表現をイディオム的であると見なすことがあるが、本稿では英語学習者が一般に考えている句レベル、特に[V+NP]型を採り上げ論じていく。

2. 認知言語学から見たイディオム

一般的にイディオムは、個々の構成要素の意味からは全体の意味を推測し難く、また統語的振る舞いも規則的ではないがゆえに、単一の語彙と同じように捉えられ言語研究の対象から排除されてきた。つまり、扱いづらいイディオムをレキシコンに押し込むことで言語理論の美しさを追求してきたのである。そのような考えの下ではイディオム表現は互いに独立したものとみなされ、形式と意味の対応関係、及びそれに付随する統語的情報を記述するという作業が専ら行われてきた。しかし、我々の言語能力はもっとしなやかなものである。既存の言語表現を参照しながら新しい経験に意味付けや名付けを施したり、また語の多義性を見れば明白のように、既存の意味をメタファやメトニミを介して拡張させたりしていく。イディオムも同様に人間が生み出し

*東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2006年10月3日 受理

たものである。イディオムが生成される場面には適切なコンテキストが存在し、それに見合った語彙の選択を行うと同時に有意味に結び付け、広く一般に用いられるようになると脱コンテキスト化して定型表現として自立したものと考えられる。特に注目すべき点は、認知的・概念的なメカニズムが働いているということである。以下で見るように、我々が対象を認知し、概念レベルで何らかの操作を施すことによって言語表現としてのイディオムが形成される。事実、ある概念が動機付けとなるイディオムにはその概念の様々な側面が写像されているのである。

2.1. メタファとイディオム

本節では、メタファが基盤となって生み出されたイディオムを見ていく。

Lakoff (1987: 380-415) と Kövecses (2002: 205) によれば、多くの「怒り」を表すイディオムは次のような概念メタファによって生成されているという³。

- MIND IS A CONTAINER
(心は容器である)
- ANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINER
(怒りは容器の中の熱い流体である)

これらは身体的、生理的、感覚運動的、知覚的経験や経験的に蓄積された慣習的知識をもとに抽出されたものである。これら概念メタファが生み出すイディオムには下記のものが挙げられる。

let off steam, blow one's stack, flip one's lid
hit the ceiling, raise the roof

例えば *let off steam* は、*steam* が怒りを表す「熱い流体」として捉えられ、容器とみなされている身体の中でぐつぐつ煮立っているかのように捉えられる状態から徐々に排出されていく様子を描いたイディオムである。密閉して火にかけた鍋ややかんを想像すれば明白のように、内に圧力がかかるとそれを排出しなければいずれ爆発する。*Explode* に「感情が爆発する」という意味があるのはこのためである。つまり、*steam* を外に出す (*let off*) ことはすなわち「うっぷんをはらす」という意味になるのである。

一方その他のイディオムは内に閉じ込められたものが一気に外へ飛び出る様子を描いたものである。このように、表現は異なるものの類似した意味を持ちうるイディオムは、概念レベルでは同一の捉え方がなされていると考えられる。

他方で、概念レベルで体系化されていないメタファに関わるイディオムも多く存在する。これは主に慣習的な知識が動機付けとなっているものが多い。例えば *break the ice* は、砕氷船が氷河にぶつかる場面を会話の場面に投影したことにより生み出されたイディオムである。船の行く手を阻む氷を打ち砕くことで航行の流れを得るという構造が、(主に初対面で) 会話が停滞している場面での誰かのユーモラスな発言や行動がその場を和ませ会話の流れを導き出すことに写像されている。これはある特定の場面を象徴化することによって形成され、広く一般に定着したイディオムである。

2.2. メトニミとイディオム

メタファと同様にメトニミもイディオムを生み出すメカニズムである。Kövecses (2002: 208-209) は *hand* に関わる概念メトニミを採り上げその生産性を論じている。

● THE HAND STANDS FOR THE ACTIVITY⁴

この概念メトニミは、人間が何かを行う際に最も直接的で認知的に際だつ部位が手であるという解釈を基盤にしている (Kövecses 2002: 208)。これらは次のようなイディオムを導き出す。

hold one's hand, put one's hand in one's pockets
turn one's hand to something,
join hands with somebody

さらに手は活動のみならずその活動を行う人を指すこともできる。

● THE HAND STANDS FOR THE PERSON

これには認知的に際だつ部分でもって全体を意味するもっと原初的な概念メトニミが関わっていると考えられる。

● THE PART STANDS FOR THE WHOLE⁵

手が人全体を表す概念メトニミが関わるイディオムは下記のようなものが挙げられる (Kövecses 2002: 208–209)。

need more hands, have a hand in something
from hand to hand, all hands on deck

我々人間は手を使って様々な活動を行う。手によって微妙な調整を行うこともある。手の中にあることはすなわち、コントロールが可能であることを示す。

● THE HAND STANDS FOR CONTROL

この概念メトニミも多くのイディオムの動機付けとなっている (Kövecses 2002: 209)。

rule somebody with an iron hand
keep a strict hand on somebody
take something in hand
fall into the hand of somebody

これら概念メトニミとは対照的に概念レベルで体系化されていない場合でもイディオムを生み出すことが多くある。例えば *bury the hatchet* は次のような経験的知識と文化的知識が生み出したイディオムである。

● bury the hatchet に関わる「戦いのシナリオ」⁶ (Yagihashi 2005: 39)

背景知識：ネイティブアメリカンは斧を使って戦いをしていた

- ① 争いの火種が発生
- ② 怒りのこみ上げ
- ③ 感情の統制
- ④ 感情の統制に失敗
- ⑤ 戦いへ突入
- ⑥ 戦いの終焉
- ⑦ 平和回復

このイディオムはネイティブアメリカンが斧を使って戦っていたということに由来する。つまり、斧は戦いの象徴であり、戦闘の場面 (シナリオ⑤) で最も認知的に際立ちのあるものである。これは概念メトニミ INSTRUMENT STANDS FOR ACTION (Kövecses 2002: 145, 154) に関わるものである。このような斧を地面に埋めるということは、もうその斧を使うことがないということである (シナリオ⑥)。*bury the hatchet* という言語表現が直接示すのはここまでであるが、我々は戦いの全体像を経験的に把握しており、戦いの終焉はすなわち平和の回復であると容易に解釈することができる。このようにメトニミが関わるイディオムは、多くの場合、慣習的知識が解釈上大きな役割を果たすことが多い。

2.3. メタファ、メトニミとイディオム

次にメタファとメトニミが相互に関わる例を挙げる。

gain the upper hand

まず *hand* は先に挙げた概念メトニミ THE HAND STANDS FOR CONTROL によって動機付けられているが、*upper* は次の概念メタファによって適切な解釈が導かれる (Kövecses 2002: 210)。

● CONTROL IS UP

地位や階級を考えれば容易に想像がつくように、権力や統制力を持つものは *up* という方向で示される。これは UP IS GOOD, DOWN IS BAD という概念メタファに基盤を置いているものと思われる。すなわち、人間は活発に活動している時や好ましい心理状態にある時は姿勢が上向くものであり、逆に心理的に負担がかかったり病気になったりすると姿勢が崩れ、しまいには床に伏せる。このような身体経験の他にも例えば「太陽が昇る」(闇からの解放／一日の始まり)「太陽が沈む」(闇の到来／一日の終焉)「給料が上がる」「給料が下がる」のように上下の方向が UP IS GOOD, DOWN IS BAD という概念メタファに基づいて解釈される事例には事欠かない。

概念メタファや概念メトニミからは独立しているながらも、メタファとメトニミの相互作用によって

生み出されたイディオムとしては *lay down the law* が挙げられる。

● *lay down the law* に関わる「法律のシナリオ」
(Yagihashi 2005: 41)

- ① 立法の必要性
- ② 草稿の準備
- ③ 詳細の修正と決定
- ④ 法律の公布
- ⑤ 法律の施行
- ⑥ 秩序の維持と違反者の処罰
- ⑦ 法律の廃止

社会に生きる我々にとって、最も重要で最も身近な法律の側面はシナリオ⑤⑥だろう。一旦法律が施行されれば、違反者はたとえ故意があろうとなかろうと処罰の対象となる。*lay down the law* における *the law* は、メトニミという概念的操作を施すことでこのような法律の強制力を喚起させ、次に法律に関わる領域から人間関係の領域へとメタファによって横断することでこのイディオムの意味は出来している。

3. イディオム学習への効果的アプローチ

先に述べたように「選択あるところに注目すべき意味が潜んでいる」のであり、イディオムには動機付けが存在することをこれまで見てきた。特に概念メタファや概念メトニミといった生産性の高いイメージによって生み出されたイディオムには、意味の共通性や類似性が見受けられる。これにより、イディオムは単に言語の問題ではなく、概念に関わる問題であるということが示唆されていると思われる。以下ではまず記憶に関わる諸問題を整理し、効果的なイディオム学習を考えたい。

3.1. イディオム学習と記憶

相澤 (2006 : 35-37) によれば、記憶のプロセスは①情報を記号化する「記銘」(coding) ②符号化した情報を貯蔵する「保持」(storage) ③情報を検索する「想起」(retrieval)、この三段階から構成されている。この「保持」は「記銘」の際の情報処理の

深さによって影響を受ける。「処理が深くなるだけ記憶痕跡がしっかりとて忘れにくくなる(処理水準効果)」(相澤 2006 : 35) のであり、イディオム学習において広く一般的に行われているような、単に形と意味の対応関係を丸暗記するという作業では情報処理が浅く記憶の痕跡がほとんど残らない。そのため「記銘の失敗」や「保持の失敗」を犯しやすくなる。横山 (2006 : 55-56) は形と意味のような対応関係の習得を促進するものとして①「有意味度 (meaningfulness)」②「親近度 (familiarity)」③「心像性 (imagery)」を挙げている。人間は意味のないものよりは意味のあるものを認知しやすく、また馴染みのないものよりは馴染みのあるものへ注意を向けやすい。対象を心的に表象できるということはそれを「知っている」ということであり、表象の輪郭が明確であればあるほど深く「知っている」ということになる。

以上のことから、「有意味度」「親近度」「心像性」が高ければ高いほど記憶に痕跡が残り、そして「記銘」「保持」「想起」といった記憶のプロセスの達成度を押し上げることになる。つまり、学習の質が問われているのである。

人間のしなやかな認知作用によって生み出されたイディオムを学習するには、その生成過程を遡ることによって促される理解が記憶の保持に好ましい影響を及ぼすはずである。人間は、関連がないものよりは関連があるものに注目しやすい⁷⁾。また形と意味の対応を単に丸暗記するよりは理解や実感を伴う暗記の方が記憶に押し込みやすく、またそれらは記憶から引き出す際の案内役となる。イディオムを構成する複数の要素の意味とイディオム全体の意味を有意味に関連付けるという情報処理プロセスを経ることで心的表象が形成され、それは「記憶に押し込む手がかり」と同時に「記憶から引き出す手がかり」となると思われる。

3.2. 動機付けと予測可能性

これまで認知言語学の観点からイディオムには動機付けがあることを見てきた。田中 (2006: 173) が言うように「恣意的な約束事の集合として言語を捉えてきたこれまでの立場に対して、『なぜそうなのか』に対して合理的な説明を行う可能性が出てきたことは認知言語学の最大の魅力である」が、これ

は前節で述べた「深い情報処理」、すなわち「質の高い理解」を得るための様々な情報を提供しうる可能性を秘めているということである。以下ではイディオム学習に対する認知言語学の応用可能性を提示していきたい。

3.2.1 動機付けとイディオム学習

2.1、2.2、2.3 節で論じたように、イディオムは恣意的な語の集合ではなく人間の認知の産物である。一見有契的な結び付きが捉えづらい部分と全体の関係ではあるが、それを生み出した適切なコンテキストや背景知識が与えられれば両者は見事に融合してくる。

「なぜそうなのか」という *attention* を向け、「なるほどそうなのか」という *awareness-raising* を高める、そして「そういえばあれも同じだ」という *networking* を促すという流れを実行することが認知的スタンスを採用することで可能となる

(田中 2006: 176)

田中が論じる *networking* は、概念メタファや概念メトニミを利用しイディオムを体系化して学習者に提示することで形成可能である。例えば概念レベルで同一に捉えられている「秘密を漏らす」ことを表すいくつかのイディオムを例に挙げる。

● REVEALING A SECRET IS FROM WITHIN TO WITHOUT

(秘密の漏洩は内から外への移動である)

come out of the closet
let the cat out of the bag
spill the beans

「秘密を守る」とは「口に出さない」つまり「『内』に秘めておく」ということであるが、秘密が「『外』に出る」「口『外』する」ということは秘密の漏洩が生じたということである。学習者にはこのように概念レベルで空間的に認知されている事態把握を説明することで、イディオムの部分と全体の関係に透明性を感じることが可能となるだろう。概念メタファや概念メトニミは主に身体的、生理的、感覚運

動的、知覚的経験を基盤にしているため、言語や文化を超越して人間であれば共有しているものが多い。つまり、母語で培った経験的知識を「記憶に押し込む手がかり」「記憶から引き出す手がかり」として利用可能であるということである。秘密が公になることを意味する日本語も同様の概念で捉えられているはずである。

秘密を漏らす

ぶちまける

口外する

漏洩する

第二言語を学ぶ際には、すでに母語で確立された豊かな認知能力や背景知識を大いに活用すべきである。そうすることにより *networking* はより強固なものへとなっていく。

3.2.2. 予測可能性とイディオム学習

前節では認知言語学の概念メタファと概念メトニミを援用することでイディオムを体系的に学習する可能性を論じた。本節では動機付けと予測可能性を区別し後者の観点からイディオム学習を考えたい。

Kövecses (2002: 201) は、動機付けと予測可能性は区別して考えるべきであると論じている。無数に存在する語の中から特定の語が選択されてイディオムを構成しているということを考えれば、すべてのイディオムには動機付けが存在すると考えても問題はないと思われる。ただ、我々はイディオムが誕生した現場に立ち会っているわけではないため、その動機付けを正確にそして完全に遡ることは不可能な場合もある。

例えば *kick the bucket* は部分と全体の関係が不透明であるためイディオム性が高く、正確な由来は分かっていない。構成要素である *kick, the, bucket* が全体として *die* という意味を持ちうるのはなぜだろうか。文献を辿ることができ最も有力とされる説は次のようなものである。

このイディオムにおける *bucket* は「バケツ」ではない。中期フランス語の *buquet* に由来し、狩りで仕留めた獲物を吊るす棒のことであった。足を棒

に括られた獲物を逆さに担いで持ち帰った光景はあたかも「獲物が棒を蹴っている」かのように見え、「死ぬ」という意味を得た。

(寺澤編 1997: 169, Yagihashi 2005: 44)

この説は、現代に生きる我々が理解しうる文字通りの意味「バケツを蹴る」とはほど遠く、心的に「死」を連想することは簡単ではない。さらにイディオム学習ということを考えると、語源的な専門知識を持ち合わせている学習者は皆無に近いと思われる。このような場合、学問的に「真理」かどうかではなく、目的に対してどの程度「有用」であるかが問われる(在間 2006: 22)。イディオム学習の場合、部分と全体の意味関係を有意義に結びつけ「記憶に押し込む手がかり」と「記憶から引き出す手がかり」を得られればよいのである。したがって、例えば現代的解釈を用いて「バケツに上がり首に縄をかけて自分でバケツを蹴って自殺する」というイメージを持つことができればより深い情報処理を行うことは可能となるのである。

4. まとめ

従来イディオム学習が機械的な丸暗記に終始してきた理由の一つは、イディオムの意味は構成要素の意味の総和以上のものであるため、その有契的な関係を捉えることが難しいというものである。しかし、そのようなイディオムを生み出したのも、そしてそれを学習しようとしているのも同じ人間であるということに揺らぎはない。本論文では、人間のしなやかな認知能力が概念を形成しイディオムを生み出す過程を概観してきた。その際、重要な役割を果たしていたのはメタファ、メトニミという概念操作であり、また部分と全体の意味関係を有意義に関連付けるという認知作用であった。Danesi (1993: 490-491) は、第二言語学習で欠けているものは「概念的流暢さ」(conceptual fluency)であり、つまりそれは「比喩に関する能力」(metaphorical competence)であると指摘している。言語表現を生み出す概念へ意識を向ける必要があるということである。この点を考慮しつつ、田中(2006: 174)が挙げている「指導可能性」(teachability)、「学習可能性」(learnability)そして「使用可能性」(usability)

を兼ね備えた新たなイディオム体系を構築し、「記憶に押し込む手がかり」と「記憶から引き出す手がかり」を意識した「質の高い学習」を目指す必要があると思われる。「ことばに潜む心の影」を探るという視点を忘れてはならない。

注

- 1 首都圏在住の高校生および大学生約 1000 人と東京都内の中学・高校で教鞭をとる英語教師約 50 名に口頭で行った。
- 2 唐須教光教授(慶應義塾大学文学部)との個人的なやり取りの中で示唆をいただいた。
- 3 心を容器とみなすのは、人間の身体をもとに「内と外」という概念が形成されているからだと考えられる。内には物体・物質を保存し、それが外へ漏れ出ると中身が明らかになるという容器がその類似性ゆえにメタファによって概念メタファを構成しているものと思われる。このように身体的に動機付けられたメタファは言語や文化を越えて広く一般的に観察される。参考までに、MIND IS A CONTAINER という概念メタファは旧約聖書にも登場していることから、身体性に由来するメタファは時代をも超越し人間であれば共有しているイメージだと言える(橋本・八木橋 2006: 35)。この概念メタファの心理的実在性に関しては Gibbs and O'brien (1990) 参照。
- 4 この概念メトニミは身体経験を基にしているので広く様々な言語で観察される。日本語では「手を貸す」「手をそめる」「手に負えない」などがある。
- 5 例えばメガネをかけた人を「メガネ」と呼ぶように、この概念メトニミに関わる日本語も数多くある。
- 6 Lakoff (1987: 397-400) の「怒りのシナリオ」を参考に作成した。
- 7 例えば「疑う」ということを考えれば明白なように、人間は日々関連付けを行っている。

参考文献

- 1) 相澤一美(2006)「語彙習得をどう捉えるか」、『言語』(4月号)、大修館書店、Pp.32-37

- 2) 在間進 (2006) 『『言語教育学』構築に向けて』、『言語』(4月号)、大修館書店、Pp.20-25
- 3) 田中茂範 (2006) 「認知的スタンスと英語教育」、『日本認知言語学会第7回大会 Conference Handbook』、日本認知言語学会 (JCLA)、Pp.173-176
- 4) 寺澤芳雄 (編) (1997) 『英語語源辞典』、研究社
- 5) 橋本功・八木橋宏勇 (2006) 「聖書のメタファー分析」、『人文学部論集』〈文化コミュニケーション学科編〉第40号、信州大学、Pp.89-106
- 6) 横山詔一 (2006) 「潜在記憶と言語習得」、『言語』(4月号)、大修館書店、Pp.52-57
- 7) Kövecses Zoltán. (2002) *Metaphor A Practical Introduction*. Oxford University Press.
- 8) Danesi Marcel. (1993) 'Metaphorical competence in second language acquisition and second language teaching: The neglected dimension' In J. Alatis (ed) *Georgetown University Round Table on Language and Linguistics 1992*. Georgetown University Press.
- 9) Gibbs Raymond W. and J. O' brien. (1990) 'Idioms and mental imagery: The metaphorical motivation for idiomatic meaning.' In *Cognition* 36. Pp. 35-68.
- 10) Lakoff George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- 11) Yagihashi Hirotoshi. (2005) 'Motivations for Idioms: The Patterns of Idioms Woven by Metaphors', In *Colloquia*, Dept. of English and American Literature at Keio University. Pp. 35-46.